第8巻1号　　2004年4月1日発行

Management System News

INTERNATIONAL QA INSTITUTE　　国際品質保証協会・ISO-MS研究会 機関誌

巻頭に寄せて

会長　三浦　昭夫

米国品質学会(ASQ)月刊誌"Quality Progress" 2004年3月号: "The Face Of Quality" に三浦会長のプロフィールが紹介された。現在、ASQの監査部会及び食品・薬品部会の国際役員のほか、学会論文の審査委員を務め、「品質は損失防止に必須。品質は"心質"」との独自論は学会で定評のあるところ。(写真提供 ASQ)

目　次

巻頭に寄せて	1
第12回ISO-MS研究会年次大会	2
有効性と効率	4
ISOボランティア活動に愛をこめて	6
スキーと審査	7
規格の解釈について思うこと	8
事務局から	8
編集後記	8

日本のISO認証制度について、2003年春の経済産業省の調査報告書から「負のスパイラル」という言葉が普及し、本号の記事も諸所でこれに触れている。これは英語の"negative spiral"、多数の要因間での「悪循環」のことで、その最大の原因はISO規格の誤訳にあると思われる。これを救う一手段として昨年夏以来、当会の西原美津子会長代行がグローバルテクノ社の雑誌「アイソムズ」にISO規格の英文の正しい解釈についての連載記事を出して大好評のようだが、是非とも諸方面で役立てて頂きたいものである。

私はこの十数年「ISO9001の元祖は1950年代に米軍が制定したMIL-Q-9858Aである」と力説してきたが、最近その原文を電子化して会員有志に配布したところ、ISO9001:2kよりよほど具体的で、よく出来ていることも容易に納得してもらえた。「百聞は一見にしかず」である。この規格はISO9001と重複するという理由から米国政府は1994年頃に廃止にしたが、これは米国の「文化遺産」として、しかるべき公的なウェブサイトに掲載するよう提唱しているところである。

一方、当会の国際活動については、あるASQ役員の要請で昨年6月からISO関連の世界中で数千人の電子メールネットに加入した。連日種々の質問が出てくるが、殆どがプロセス、objective, モニタリング、実効性、是正・予防処置、改善、…といった用語の解釈に起因するものであり、都度これらの解明がてら即答という仕儀になった。英語が母国語の人達への記名式の公開回答だから毎度真剣だったが、どこの国の言葉でも、語句よりも本質の理解が肝心なのである。日本ではさらに、非常時対応、リスク管理、危機管理(リスクとは別問題)、防災、不可抗力事項対策について誤った解釈による混同がまかり通っていて、悪循環を益々助長する危険性が大きい。その是正と予防には、これらの相違をわきまえて適切に対応することである。

国際品質保証協会は、QAに関連する活動を通して日本の繁栄に奉仕・貢献することを目的として1991年に設立された任意団体で、米国品質学会日本支部やIATCA援助会員として国際的にも活動しています。ISOマネジメントシステムの効果的活用について総合的な研究の目的で1992年に同協会を母体としてISO-MS研究会が設立され、今日まで協会が全面的にその活動を支援しています。

第12回ISO-MS研究会年次大会

IQAI会員／ISO-MS研究会幹事

一瀬 功

第12回ISO-MS研究会年次大会が2003年12月6日(土)午後東京都港区虎ノ門の日本自転車会館において開催されたので、その概要をまとめた。

第1部:開会挨拶及び年次報告

開会に際し、会長より次のような挨拶があった。

1) 会の目的のうち、会員の親睦融和は最初から達成されているが、相互の研鑽は相変わらず不足している。会員が集まっているだけでは活性化にならない。
2) 情報を左耳から入れて(インプット)、即座にそれを右耳から出す(アウトプット)という100%効率というプロセスだけで実践しないなら何にもならない。
3) 日本のレベルアップのためには、まず会員各人がレベルアップするしかない。

いつもながらの辛口コメントで、出席者は肝に銘じたことだろう。続いて事務局より、2004年度の計画として、4月10日及び9月11日に特別講習会、12月4日に年次大会を開催する旨の報告があった。

第2部:研究発表

●第四分科会:「コーポレートガバナンスのリスクマネジメント」

冒頭で、新聞の切り抜き50枚位が投影された。いずれの切り抜きも皆が知っている"不祥事"に関するもので、現在の日本にいかに不祥事が多いかを示す演出であった。

"なぜこのように不祥事が多いのか"、"ISO9001/14001を登録しているのに、経営が良くなった実感をもてないのはなぜか？"を切り口に、PD6668:2000[組織が戦略的リスクをどのように明らかにし、管理するのかの指針]、及びCOSOレポート [コーポレートガバナンスに関する研究報告書:1992]から核心に迫ろうとするものであった。

また、小林元一幹事は"チャンスをものにするには、リスクを明確にして危ない目に合う確率を下げる努力が必要で、リスクから逃げるだけではチャンスも逃げる"ことを力説していた。

●第二分科会:「有効性と効率」

2003年9月6日の第2回合同研究会における日本工業標準調査会の「管理システム規格適合性評価専門委員会報告書」にある"負のスパイラル"現象も含めて「QMSの有効性及び受審側・審査側のそれぞれが抱える現状の問題点解決」に関するパネル討論の結果が発表された。("負のスパイラル" 現象に対しては、6月に会長から委員会宛に回答済み。)

その後本件に関してケーススタディーも含めて分科会でメールによる活発な討論に発展し、結論も出ているが、会場ではケーススタディーのコピーが参加者各自の自習用として配布された。

発表の他に、会長より「有効性(実効性)と効率の審査・監査」及び「プロセスとシステムの有効性と効率」の講演があった。第三者審査は、"適用規格への適合性" を審査するものだから有効性は規格記載の範囲までで、それ以上は領域外、また、無理である。「有効性と効率」は受審側の活動で、とりわけ内部監査で徹底的に実施すべきであるとのこと。"有効性"が声高に叫ばれている昨今、参加者の悩みが解消された一瞬であった。

●第一分科会:「各種国際規格の現状と方向」

マネジメントシステム規格について、お馴染みのISO 9000s/14000sを初め、QMSの指針、社会的責任、危機管理、情報機密保持、試験所／校正機関認定、医療機器、航空宇宙、自動車、通信、食品安全、情報セキュリティー、プロジェクト管理、苦情対応MS、労働・安全、以上16種の国際／国内規格の研究を推進中との現況報告があり、要点は次の通りであった。

1) ISO/DIS14001の改訂要旨
1996年版と基本的な変更はなく、全条項の要求内容を明確にすることに主眼が置かれ、主な改訂内容13項目について説明があった。

2) リスク管理(JISQ2001関連)
リスク管理は、全体のQMSの一部ではあるが、同時に心臓部であろう。リスク管理のみを審査／監査対象とする機会は少ないと見られる。適用範囲に、認証用規格ではないと明記してある。
3) 情報セキュリティー(BS7799関連)
規格の目的は情報資産の保護、及び顧客／関係者に信頼を提供するに十分なセキュリティー管理策を設計することにある。報告によると、"競争上の強み、資金の流れ、収益力、遵法性、及び企業イメージを維持、改善すること"にある。
4) 中国語のISO9001規格
増田幹事が中国出張で入手した中国語表現を報告した。さすが、漢字発祥国と思う事例が沢山あったので、その一部を紹介する。

[英語]	[日本語]	[中国語]
Quality	品質	質量
Top management	経営上層部	最高責任者
Commitment	方針声明	承諾
Communication	連絡・伝達	溝通
Conformity	適合性	符号性
C.I	継続的改善	持続改善
Process	作業工程	過程
Procedure	手順	程序

●第三分科会:「監査技法の研究」

副題を"監査の達人をめざして"として、今年度は「審査の付加価値」をテーマに活動した。テーマを取り上げた動機は、1)ISO9001:2000に適合性だけでなく継続的改善が追加されたこと、2)世間で審査の"付加価値"が話題になっていることを挙げ、現在までの進捗状況の報告があった。

受審側が第3者審査に望む外面的なこと(登録の目的)として、1)世間、顧客、親会社からの信頼を得たい。2)他社との差別化を図りたい、と分析し、同時に内面的には、1)組織に何がメリットかを考慮した審査、2)品質目標の設定、達成過程に深く係った審査、3)改善の余地を指摘する審査などを挙げた。"付加価値"を具体的にするにはまだ、議論の積み残しも多々あり、継続して活動するスケジュールが説明された。

●西日本支部:「西日本支部の研究風景」

冒頭、西日本支部の活動状況として、福岡での7回、及び大阪での2回の定例会合の内容報告があり、その中から福岡で毎月実施してきた「個人発表」の内から次の5件が報告された。

1) QMSとピーター・ドラッカーの「ネクストソサイエティー」との関連
2) 冷凍冷蔵食品の配送及び保管時の温度管理
3) コンクリートの信頼性向上
4) 環境法の最新版管理の重要性
5) イントラネット利用の文書管理システム

これらは、日頃の業務経験及び関心事について会員間で討論したことの発表で、また、個人発表者5人の写真が投影されて間接参加となったことも非常に有意義であった。

会長総括:

1) リスク管理は日本では最近話題になっているようだが、30年前から常識のことである。もっとも、世界的にも単に災害と保険関連に限定している傾向があり、それは間違いである。リスクとは危険性の確率のことで、その把握と管理は重要だから、積極的に研究すること。
2) 実践の伴わない机上の空論は避けること。
3) "負のスパイラル"と言われている悪循環を打ち破るために、会員は率先努力すべき。

なお、発表の合間に飛び入り講演(?)として会長より字引に出ていない、日本ではほとんどが知らない英語"Chrome Dome"の意味について謎かけからの解説があった。答えは、クロムのように光った円い屋根、すなわち、"禿チャビン"。耳(取っ手)がついていて、熱くなると湯気が立つということから、ズバリである。同時に幾つかの紛らわしい用語の紹介があり、真意は用語を一対一で解釈すると"Dome"は"チャビン"ということになり兼ねず、他の言葉ではなお重大な間違いの元になるから適切な意味を選ばねばならないとのこと。これがISO規格の誤訳にも通じるわけで、日本の"負のスパイラル"の一因となっている。しかし、ユーモアと話し方から全員爆笑の連続。真意の理解はさておき、大会の潤滑剤になったことだけは間違いない。

むすび

5件の発表は、構成する人々や地域、取り巻く環境により特色のある発表であったように思う。各発表に対する活発なる質問あり、自説の主張あり、笑い声ありで、意義ある数時間であった。厳しい質問や自説の主張の渦はその後の懇親会で益々発展して議論の花が咲き、なんと研究熱心で、しかも愉快な人間の集団であることかと、今さらながら驚かされた。

最後に、会場準備など裏方を支えて下さった方々のご好意に、心から敬意と感謝を表してまとめとする。

有効性と効率

会員　立野信之　CQA/CQE

QMS 構築の方向性

有効性と効率の話に入る前にまず、どんな QMS の構築が求められているか考えてみたい。ISO9001 は第三者審査登録に使われる規格だが、具体的な方法論までは規定していない。組織は、具体的な QMS の運営方法を自分で構築しなければならない。組織は自組織に合った効率的で有効性の高い QMS を構築しないと市場競争に敗退し、顧客の期待と要求を満足する製品が提供出来なくなる。

疑問の投げかけ

ISO9001 は第三者審査登録に使われ、"有効性"がキーワードになっている。しかし、この審査は適合性審査であるから、①有効性はどのように審査するのか、②有効性など規格に持ち込まなくても、要は注文どおりの製品が受け取れればよいのではなど、昨年さまざまな議論がなされた。それを受けて、"有効性"と"効率"をどのように捉えるか、"組織による QMS 運営"と"第三者適合性審査"をどのように行えばよいかを考えてみようということになった。

メールでの討論

立野:ISO9001 の 4.1 f) ではプロセスの有効性を継続的に改善することを要求し、ISO9K で、有効性は"計画した活動 (planned activities) を実行し、所期の結果 (planned result) を達成した程度"と定義している。第三者審査では、この意味での有効性が改善されているかを評価すればよいと思う。

山田:第 2 者監査では、パフォーマンス(業務処理スピードも)はもちろん、固有技術(ノウハウ)を含めて検証し評価できる。しかし、第三者監査ではおそらく限界がある。

小田:実際の組織活動では、無闇に人や金をかけるわけにはいかない。ISO9001 には活動と結果をバランスさせるという考えが抜けていると思う。また、ISO9001 では有効性の基準がないのだから、有効性の監査が出来ないと思う。

三浦:"有効性"の ISO の定義が"所期の結果を実現できた程度"となっているが、100%でなかったら"不十分"又は"中途半端"で有効とは言えないことが多いから、ここはよく考えなければならない。

石原:Effectiveness という言葉は ISO9k 以前からあるわけで、ISO 9k に過度に縛られるのは自然ではなく、有効性の定義から入ると机上の議論に陥る可能性がある。

西原:ISO9K で定義された有効性について議論しても知れたこと。質の良い監査をしたい、受けたいというのは誰しも同じ思いだと思う。ケースを想定して、「監査」や「適合性」を通して規格の向こうに見えてくるものを議論すると面白いのではないか。

ケーススタディー

従業員 100 人の自動車部品製造会社(A社)は、大手の自動車製造会社(B社)への自動車部品(C部品)を製造、販売している。毎月B社からは、同種の部品を供給させている100 社について、"順位" が発表される。順位の算定は、C部品の直径に関する工程能力指数 Cpk(自己申告)と部品1万個あたりの不良発生件数(B社による)で行い、この評価で順位が下位 30%に入ると翌月の購入量を 30%削減される。

購入量を 30%削減されると、A社の経営は赤字に陥り、その存続が危ぶまれる。A社は、この厳しい経営環境の中で、なんとか自社が存続できる販売量と収益を上げたいと必死で仕事に取り組んでいる。A社の製造プロセスには当然、必要な手順書と管理項目が規定されている。ここで、以下について議論する。

1. A社の製造プロセスの有効性とは何か？
   その判断(良否)基準は何か？
2. A社の製造プロセスの適合性とは何か？
   その判断(良否)基準は何か？
3. A社の製造プロセスの効率とは何か？
   その判断(良否)基準は何か？
4. 上記 1, 2, 3 を踏まえて、A社はどのようなプロセス運営をするのがよいか？
5. 上記 1, 2, 3 を踏まえた上で、ISO9001:2k の第三者審査はどのように行えばよいか？

上記ケーススタディーを IQAI 会員と ISO-MS 研究会第 3 分科会へメールしてみたところ、多数から回答が寄せられ、活発な議論がなされた。それにより、参加者の"有効性"と"効率"の考え方や、プロセス管理について具体的に整理ができて理解も深まったと思われる。この議論により、今後さまざまな業種やプロセスの"有効性"と"効率"を明確にする必要が生じた場合にも、対応していくことが可能になると思われる。回答の掲載はここでは控えるが、各位で取り組んでみられるとよい。鍵となる点は以下のとおりである。

	プロセス(業務工程)管理に関する着目点
有効性	規定通りに実施し、うまく機能して、その結果、所期の目的を正しく達成して、効果が出ているか
効率	迅速、正確、経済的に実施されているか

◆有効性の視点
・所期の目的(Cpk、順位、不良件数の削減)の達成度
・プロセスとして機能上の不都合の有無

◆適合性の視点
・手順書の励行
・管理項目の合否基準の満足
・製品規格値の達成
・未達成の場合の修正・是正・改善の励行
・ISO9001 規格に関しては、その要求事項の満足

◆効率の視点
・時間と能率の点で無理、無駄なく円滑に作業が実施できているか
・投入した経営資源(資本、設備、人員)は妥当な量か

◆プロセス運営の視点
・効率よく運営し、不良発生を最小限にし、顧客苦情は更に減らす工夫をしているか
・所期の目的を達成しているか分析し、問題の状況により、適宜、改善しているか
・有効性、適合性、効率の全てが良の判断領域となるように管理しているか

◆第三者適合性審査(ISO9001)の視点
・全ての手順書の遵守・励行状況、結果と基準との照合、Cpk の確保状況、顧客仕様の励行状況、不良の処置及び低減対策の実施状況に重点を置く。
・ISO9001 の全ての規格要求事項に対する適合性を評価するが、それにはプロセスの有効性が継続的に改善されているかを評価することを含む。

第三者審査と内部監査の役割の相違

顧客、受審組織の両方に効果を出していくには、組織の QMS 運用姿勢や内部監査がとても大きな役割を果たすことになる。第三者審査は、あくまで規格適合性という観点からの審査であり、独立性確保の為にコンサルティングが禁止されているため、具体的助言が出来ない。組織は、自ら積極的に経営者の判断や内部監査によって、"有効性"や"効率"に関する問題点を摘出し、改善して行くことが必要である。

	第三者審査	内部監査
有効性	規格適合性の面からの確認のみ(有効性の判断基準の良し悪しや改善の程度の良し悪しまでは言及し難い)。	有効性の判断基準の妥当性と有効性の改善策を徹底的に評価し、また、改善の程度も評価すべきである。
効率	立ち入り出来ない。	効率の程度の良し悪しや効率の改善策を評価出来る。

傾向分析の重要性

有効性と効率については、組織が自ら十分に吟味して改善することが期待されるが、その際には「傾向分析」とそれに基づく対応が大きな意味を持ってくる。有効性や効率の指標が過去から現在にかけてどう変化しているか(傾向性)を分析し、また、できればベンチマーキング(同業他社との比較とは限らない)も行い、必要があれば改善して行くことがポイントである。

MIL-Q-9858A における "有効性"と"効率"

ISO9001 の起源は MIL-Q-9858A(既に廃止)だが、昨年 12 月にそれを熟読する機会に恵まれた。この規格は、複雑な(手の込んだ)部品・装置は、検査と試験による品質管理だけでは契約要求事項への適合は得られないとして世界最初に制定された品質保証体制(システム)に関する規格である。規格の随所に"有効性"と"効率"に関する記載がある。"有効性"、"効率"いずれも、45 年前の規格発祥時点において考慮されていたのである。以下、抜粋して紹介する。

【抜粋】
・The contractor's quality program shall be planned and used in a manner to support reliability effectively. (Clause 1.4)
・Effective management for quality shall be clearly prescribed by the contractor. (Clause 3.1)
・The contractor shall maintain and use quality cost data as a management element of the quality program. (Clause 3.6)
・The effectiveness and integrity of the control of quality by his suppliers shall be assessed and reviewed…. (Clause 5.1)

ＩＳＯボランティア活動に愛をこめて

IQAI 会員／ISO-MS 研究会幹事
岩佐　允勝

はじめに

高尚な本誌面を借りて、毎度、環境 ISO に対する批判ばかり書いているので、今回はISO9000認証制度の方でも「少しは世のため、人のために働いているぞ」と自己アピールしておこうと思い、拙文を呈することにした。私は神奈川県知事より、「品質マネジメントと環境マネジメント分野の“技術アドバイザー”」というのを拝命している関係から神奈川県産業技術交流協会（略称：神産協、県下の企業約 500 社加盟）の「ISO9000 研究会」の主査を引き受けて 3 年になる。周知の如き県の財政事情であることから、無報酬のボランティア活動で毎月 1 回、海老名市にある神奈川県産業技術総合研究所まで足を運んでいる。

変化する ISO9000 への期待

神産協の研究会は、中小企業の ISO9000：2000 への対応支援が目的であったが、毎年、大小織り混ぜた企業が 50 社程応募し、毎回 30 社程が参加する会合となっている。会員企業は無料で参加出来ることから、かなり人気も高いようだ。そこで会場だけは国際会議場のように立派な会議室を準備して戴いている。ISO9001 の 2000 年版切り替えの方は、指導の成果（？）か、各社共順調に終了したようだ。しかし、2000 年版切り替えが終了した企業も数多く参加して来るので、確認したところ、ISO に関する「新たなる情報」と、「如何に有効に使うか？」に関しては、全体の必要性が変化していた。

IQAI 諸先輩方の登場

そこで、最近は所要時間の前半を「マネジメントに役立つ情報」の発表、後半を「各社の ISO9000 の発表と問題提起」と分けて運営している。前半の発表部分は、「ネタ切れ」にならぬよう、私の親しい友人達にもボランティア講師として協力願うことにした。県から、「足代」だけは出してもらうことにしたが、奉仕活動そのもので、心苦しいけれども、実は神奈川県在住のIQAI会員の先輩方にも、個人的に御願いし登場願っている。お蔭様で大変好評で、今後も神奈川県と先輩方との繋がりが出来ることを期待したい。

相変わらずの審査員ドノ

一方、各社が発表する ISO9000 に関する問題点であるが、ここから見えてくるのは、次の二点である。一つは、いまだに、どうでもよい様な「不適合発見のお土産」を持ち帰ろうとする審査員の姿である。企業の幹部なら、自社のQMSについての本質的な問題点を、大抵は把握しているものだ。ピントの外れた不適合を見つけて喜んでいる審査員をみて、受審側は腹の中では、馬鹿にして笑っている。再三、問題にされている「何のための ISO か？」を真剣に考え、企業にも、社会にも役立つ審査を考えて行かないと、この制度は遠からず崩壊する。もう一つは、審査においてまともなトップインタビューが出来ていない例が多いことだ。このように、今でも審査員は安易な指摘をほじくり出すことが自分の仕事と勘違いしていることと、経営には全然触れることができない（そこまでの見識がない）という二点が、最近問題になっている「負のスパイラル」の大きな要因であろう。

相手は手強い勝ち残り企業

昨今の企業における空洞化の時代、現在まで生き残っている中小企業の経営者は相当なレベルの人達であることを審査側は先ず認識すべきである。 毎日が真剣勝負であるこれらの方々に、マネジメントの本質に立ち入った審査をするには、審査側のレベルも、幅広いマネジメントに関するスキルと柔軟な思考能力を持ち合わせていなければ、到底太刀打ち出来ない。形ばかりの審査を繰り返していては、すぐに正体を見破られ、更に効果にも疑問を持たれることになる。特に、審査機関はこの点には充分留意して審査員の人選を行うべきであろう。

おわりに

今年度も、この「ISO ボランティア」は続く予定なので、郷土を愛するIQAIの先輩方諸氏に宜しくお願いしたい。また、県外の先輩方も、1 時間程度のテーマで自由なお話をお願いしたい。ちなみに私は「東京の住人」である。なお、かくいう自分も、自己管理に注意して、「不適合」審査員にならないように気をつけている。皆様は如何ですか？

スキーと審査

IQAI 会員／ISO-MS 研究会幹事

井上　庫男

はじめに

今年の２月に４日間、樹氷の蔵王でスキーを堪能してきた。その過程で、何事も技術を習得するには次の３点が肝要であるという原則を改めて痛感した。これらは、審査も含めて各種業務にも通ずると思われるので、その経過を紹介する。

技術習得の三原則

1. 技術の習得には基本が肝心
   何事も、焦らず基本をしっかり身に付ければ、上級への移行が比較的楽に出来るようになる。
2. 正しい技法の伝授
   経験豊かな先達に正しい技法をOJTで学ぶと、技術の向上だけでなく、心構えまでも含めて体験でき、得るものが大きい。
3. 理論と経験は車の両輪
   正しい方法での実践経験を伴わない机上の空論と、原理・原則の伴わない経験は、いずれも技術の習得に直結しない。

スキー入門の経緯

評論家の竹村健一氏が「50歳を過ぎてから始めたスキーの魅力」について紹介した文に触れ、機会があれば自分も試して見たいと考えていた。そんな折に千葉市民スキー教室があるときいて、一昨年と昨年参加し、初歩的な滑りの手ほどきを受けた。この教室では、スキー愛好家の経験者がコーチになり、入門者・初心者・中級者・上級者をクラス別に分け、献身的な指導を行っている。初回の一昨年は受講者仲間で評判の教え上手な講師の入門者クラスで2.5日指導を受けて、何とか中級コースを恐る恐る滑れるようになった。昨年は上のクラスに入らず、再び入門者クラスで基礎技術をみっちり復習して身につけた。

今年は、元いた会社のスキー部創設者（72歳）と幹事である友人（67歳）の二人に専任コーチになってもらい、蔵王の中級コースに挑戦した。

初日に蔵王国際ホテル隣接のゲレンデからのリフトを降りた所で基本的滑りのチェックを受けたら大体滑れたので、ゴンドラを2回乗り継いで一気に蔵王の頂上まで上っていった。

快晴の頂上からの眺めの素晴らしさと、最初のスロープの緩さから、中級コースであることも忘れて大先輩に前後から見守られて、何とかゲレンデまで滑り降りることが出来た。この間、姿勢・ターンの仕方等の指導を受け、次第に肩の力も抜け、滑る楽しみを味わえるようになった。

二人の大先輩による手取り足取りの特訓により、彼らの数十年間に蓄積された確かな技術に直接接する機会に恵まれただけでなく、滑降中はもちろん、休憩・食事での歓談等を通して、今までは気の付かなかったこと、疑問に思ったこと、更には食事のことや体力の鍛え方も含めての助言まで受けられた。また、この間に撮ったビデオで、自分や先輩の滑りを見ることにより客観的に問題点に気付き、先輩からの忠告や講評もよく理解できた。

翌日はスキー部の別の先輩たちも合流したので、そういうベテランぞろいの仲間に加えてもらい、中級のコースを楽しく滑ることが出来た。

スキーでの実感

昨年までの２回はスキーに慣れることに精一杯で、講師の言葉を理解することだけに終わっていたのだが、昨年みっちり復習して身につけた基礎技術は体が覚えていてくれて、また、今回は事前・事後に教本でスキー理論を自習したこともあって、先輩方の助言の原理・原則を納得することが出来た。そのお蔭で、多少の応用動作もできるようになっていた。おまけに「スキー教本」にない技術の体得も出来たように思われる。要するに、これらの原理・原則を通して現在の自分の技術レベルを正しく評価すると共に今後のレベル向上の目標を明確に設定できるようになった。

むすび

スキーは遊びとしてしか思っていなかったのだが、今回の体験を通して、前述の三原則、特に、正しい方法での実践経験と理論とは車の両輪というより寧ろ相乗効果も出すということを痛感した。技術の習得のためのこれらの原則は、仕事にも趣味にも共通することを再確認した次第である。

規格の解釈について思うこと・・・

今号の巻頭言の中で、三浦会長が日本でのISO認証制度に見られる「負のスパイラル」の要因の一つとして、規格原文の誤った解釈を挙げておられる。これに意を同じくする方は少なからずおられるかもしれないが、それについて根拠を取り揃えて適切に説明しようとする人は極めて少ないのではないか。この国では、世の通説でないことを公的な場で自説として述べるというのは、仮令それが正統の意見であったにせよ、大いなる勇気を要するのである。世の通説、あるいは大多数の意見には異議を唱えず常に是として受け入れることから全ては始まるのである。そうすることが、わが身の利益と安全に沿うからであろう。皆で渡れば怖くないし、攻められて責任を被るようなことにもならない。この国で"国際性"が問われるものは、全てこれに似ている。例えば、政治の国際関係などもそうであろう。他国の動向を見計らってから自国の方針を決める。自国の方針が先にあって、他国の動向を窺う、あるいは働きかけるというのが本来の順序だと思うのだが。往々にして、国を含め、是非の判断は大多数の意見に預けるという生き方に、危うさを感じて不安に駆られるのは私だけではないと思いたいが、果たしてどうであろうか？

ISO規格のJIS訳も然りである。ひとたび国内規格として発行されたからには、もはや原文に戻って読む必要などないと考えるのは危険である。誤訳は必ずしも意図してなるものだけではない。一語ずつ読めば必ずしも誤訳ではないのにかかわらず、全体として読めば、間違って解釈されても致し方ないようにしか読めない、というのが多くの誤訳であることをご存知であろうか？　（西原　美津子）

◇◇◇ 事務局から ◇◇◇

【IQAI 総会開催】

- 2003年12月6日(土) 東京自転車会館で開催。
  - ・2004年度の活動計画を協議。
  - ・特別講習会を2回開催、2004年9月の中国上海でのASQ大会に三浦会長派遣、他を決定。

【特記事項】

- 2003年9月以降、西原会長代行がグローバルテクノ社「アイソムズ」に「英語で読む ISO」を連載中。
- ASQの月刊誌"Quality Progress" 2004年3月号 "Face of Quality"に、三浦会長の紹介記事が掲載された。

【今後の行事予定】

- ASQ 資格試験(会場はいずれも東京目黒の予定)
  2004年6月5日(土) - CQA/CQE/CSQE
  2004年10月16日(土) - CQManager/CRE/Six Sigma
  2004年12月5日(日) - CQA/CQE/CSQE
- 5月24－26日 ASQ-AQC年次大会、於トロント。
- 6月下旬 QA特別講習会 (日取り・会場未定)
- 9月上旬 ASQ上海大会 (三浦会長講演予定)

（山田　八栄　記）

編集後記

当会の2003年の1年間は、一瀬氏の「第12回ISO-MS研究会年次大会」に総括されているが、中心課題は立野氏の「有効性と効率」であった。また、ISO 9001の元祖MIL-Q-9858Aに触れた会長の「巻頭に寄せて」は今後の方向を示している。今年は色々な意味で原点に帰って考える年であった。

最近「日本がreactionの国からactionの国に変わりつつある」という外国の記事を、ある評論家がテレビ番組で紹介していた。今まで受身の反応だけだったのが少し変わってきたということなのだろう。一方、「＊＊出羽の守」という言葉を聞いたことがあるが、これは何かにつけて、「(権威ある)＊＊先生の意見では」とか、「アメリカでは」といったように自分の考えを言わない(或いは、持っていないから言えない)人のことだそうである。ISO関連だと「相磯出羽の守」とでもいうことになろうか。反応なり反作用をするには、何が作用したかを知らないとできないから、「＊＊出羽の守」は嫌がられ、時には内心バカにされながらも、この限りにおいては、存在意義があるようだ。岩佐氏の「ISOボランティア活動に愛を込めて」で触れているように、ISO規格に関しても"reaction"を卒業して"action"に転じている企業も増えてきている。井上氏の「スキーと審査」は、負のスパイラルに直結している重大問題を、実体験から提起しているとの見方もできる。「相磯出羽の守」的な発想は、とっくに賞味期限が切れていたのではないか？今回、そんなことを考えさせられたことである。

（石原隆昌）

本　部：〒745-0072 周南市弥生町2丁目1番地
西原技術事務所 気付
Fax：0834-21-0716; E-mail：nishihara@iqai.org
機関誌発行／頒価：年2回／年間1000円

会長 三浦 昭夫 (有)国際品質システム
Fax：03-3712-3399; E-mail：miura@iqai.org
事務局代表 山田 八栄 (山田品質研究所)
Fax：046-262-7040; E-mail：welcome@iqai.org